

吉備池廃寺の調査

—第111次

1 はじめに

桜井市吉備に所在する吉備池廃寺は、1996年度にはじまる桜井市教育委員会との共同学術調査により発見された、飛鳥時代の寺院跡である。検出した建物跡の規模に加えて、瓦の年代観とその出土状況などから、舒明11年(639)に発願された日本最初の勅願寺である「百濟大寺」の蓋然性がきわめて高いと考えられている。

吉備池南東の土壇を発掘した第81-14次調査(1996年度)では、掘込地業をほどこした巨大な基壇を発見し、金堂跡と推定された。また、この西方にあるもう一つの土壇の調査(第89次、1997年度)では、心礎の据付穴や抜取穴などを確認し、塔跡であることを明らかにした。あわせて、南面回廊の一部も確認している。

この時点で、金堂を東に、塔を西にならべる、いわゆる法隆寺式の伽藍配置(図83左)と想定されたため、第95次調査(1998年度)では、金堂と塔の中間の南方に調査区を設定し、中門の発見を試みた。ところが、想定位置に中門はなく、南面回廊の石組雨落溝がそのままのびることが判明した。また、この調査では、塔の西側を回廊が取り囲むことも確認している。

つづいて、講堂および東面回廊などの発見を目標とした第105次調査(1999年度)では、ほぼ想定位置に東面回廊の雨落溝を検出し、回廊の東西幅をほぼ確定することができた。しかし、金堂と塔の中間北方に、講堂を発見することはできなかった。

一方、金堂跡の北方では、桜井市教育委員会による調

査がおこなわれた(1998年度)。ここでは、巨大な柱掘形をもつ桁行6間以上×梁行1間の掘立柱建物を発見し、吉備池廃寺の僧房と想定されている。

以上のような調査成果から、当初、法隆寺西院伽藍と同様とみられた吉備池廃寺の伽藍配置は、大きく修正を迫られることとなり、杉崎廃寺(7世紀末創建;岐阜県古川町)のように、中門や講堂は金堂の南北軸線上に建つのではないかと推定されるようになってきた(図83右、『杉崎廃寺跡 発掘調査報告書』古川町教育委員会、1998年を一部改変)。このため、本年度は、中門および講堂、北面回廊の検出を目的として、金堂の南側と北側に調査区を設定した。以下、便宜的にこれらを「南区」、「北区」と呼ぶ。調査は、桜井市教育委員会と共同で、2001年1月9日に開始し、4月24日に終了した。調査面積は、南区が535㎡、北区が605㎡である。

2 検出遺構

南 区

第95次調査区の東方で、金堂の南にあたる。第81-14次調査でも、同じ水田の北方で9×3mの南北に長いトレンチ調査をおこなっているが、そこでは顕著な遺構を確認していない。南区で検出したおもな遺構は、中門、南面回廊、東西溝、掘立柱塚などである。遺構のほとんどは、古い流路に由来する砂礫層の上面で検出した。検出面の標高は約80.7mである(図85)。

中門SB320 中門の遺構は、石組雨落溝の一部とその抜取溝、雨落溝を構成する石の抜取痕跡などである。

調査区の西南隅付近に、南北方向の石組溝がある(図86)。10~30cm大の自然石で溝の側石を形成し、底には石を敷かない。溝幅は約30cm、深さ約25cmである。この石組溝は長さ約2.5mでとぎれるが、南端でこれにつながるように、幅1.0m、深さ6~10cmほどの素掘溝が東にのびている。そして北に折れたのち、クランク状にさらに東へのび、溝は全体で方形に張り出すかたちとなる(SD321)。また、この北側にも、これとほぼ対称形をなす、素掘溝で区画された張り出しがある(SD322)。その素掘溝では、玉石の抜取痕跡を確認できる。

一方、先述した南北方向の石組溝の北端西側には、これにつながる石組溝が残る。座標からみて、この溝は第95次調査で発見した南面回廊南雨落溝SD161の延長と考

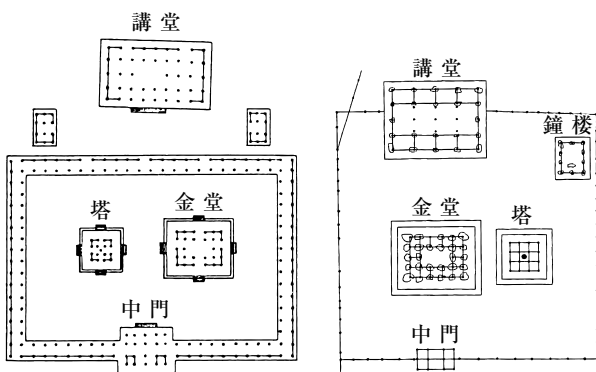


図83 法隆寺西院(左)と杉崎廃寺(右)の伽藍配置

えてよい。したがって、先述したSD321とSD322で囲まれる部分が中門SB320の基壇であり、これらの溝は、中門の雨落溝もしくはその抜取溝と考えられる。

中門の基壇外装はまったく残らず、基壇の掘込地業もない。基壇上面は、斜行溝SD323と後述する東西溝SD180などで破壊され、基壇土や、礎石の据付痕跡、抜取痕跡も確認できなかった。ただ、建物内部とその北側

には明黄褐色の粘土ブロックが混じり、これを除去してSD322を検出したことから、この粘土ブロックは基壇土に由来する可能性がある。また、東南隅柱に比定できる位置には、礎石の据え付けおよび抜き取りに関わるとみられる土質の違いがあるが、きわめて痕跡的である。なお、階段の痕跡も確認できなかった。

以上から、中門の基壇規模は東西12.0m×南北9.8mほ

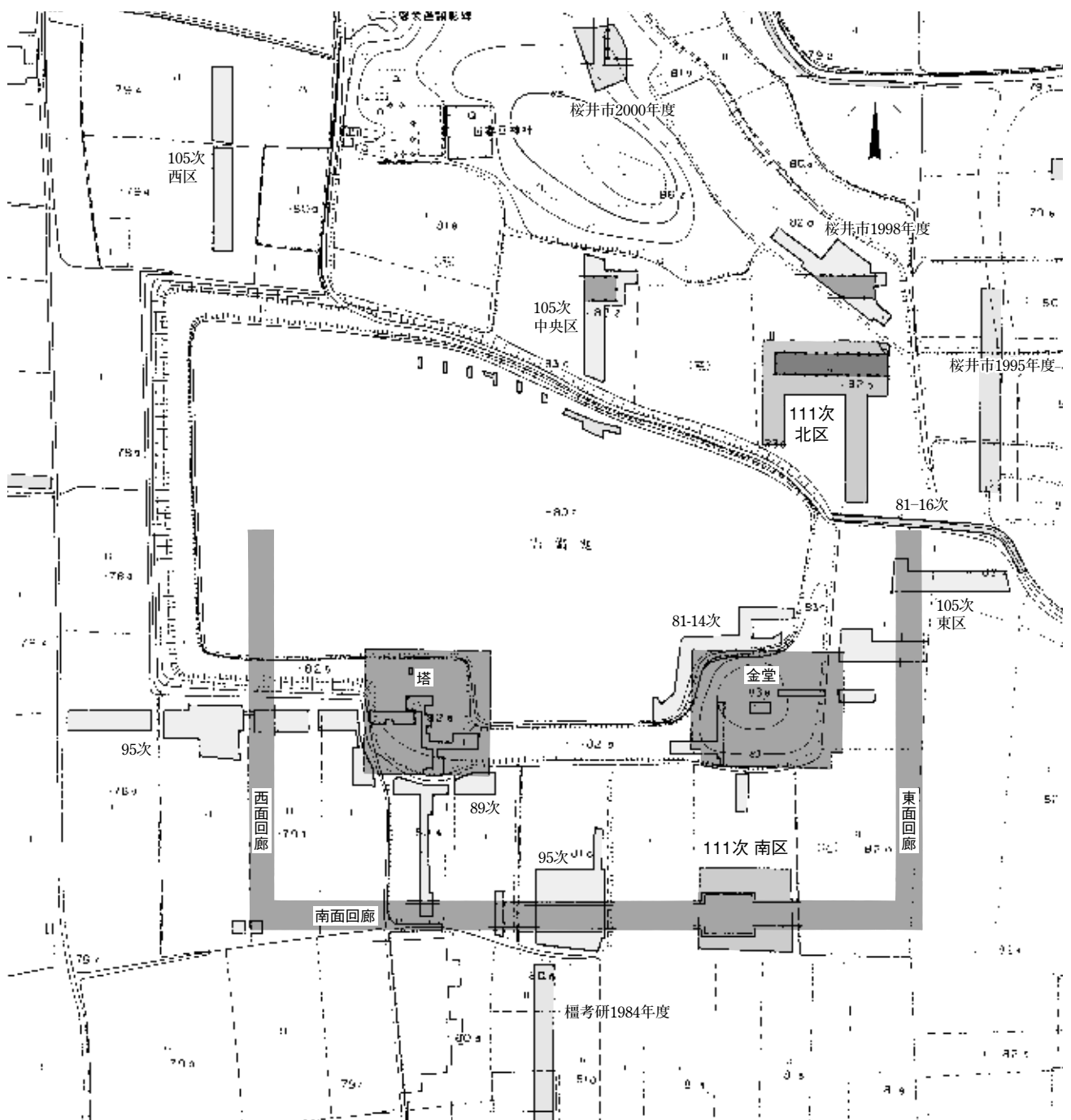


図84 第111次調査位置図および加藍復元図 1:1500

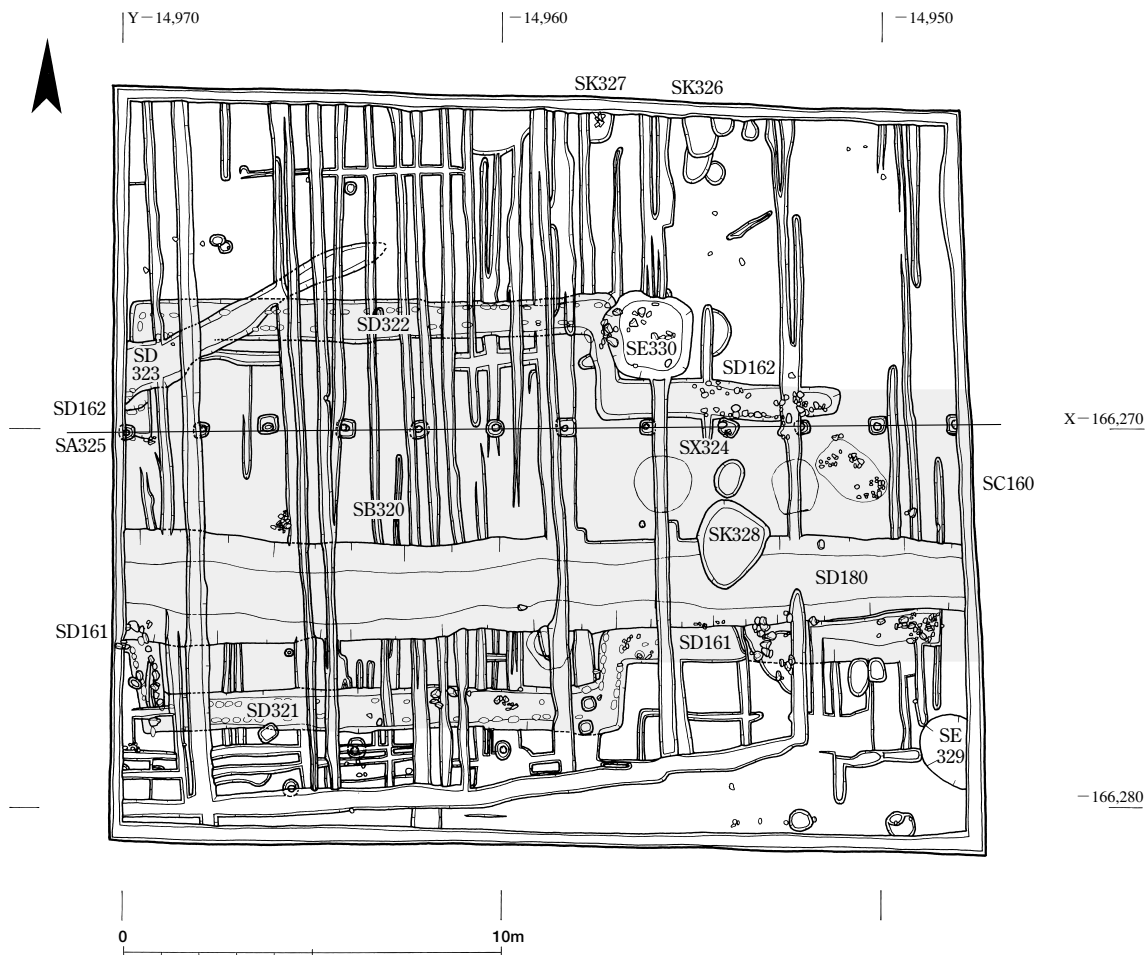


図85 第111次調査 南区遺構図 1:200

どと推定され、正面3間×側面2間の中門を復原できる。柱間寸法はまったく不明だが、一案として桁行中央間3.6m、桁行両脇間2.7m、梁行3.4m、軒の出1.8m程度と想定することができる。

南面回廊SC160 前述したように、第95次調査で検出した南面回廊南雨落溝の延長にあたる石組溝SD161を確認した。検出した長さは0.7mほどで、すぐに中門の雨落溝SD321に接続している。中門の東でも、南面回廊の南側の雨落抜取溝(SD161)および北側の雨落抜取溝(SD162)と側石の抜取痕跡を確認したが、東端付近では削平されている。

基壇外装や基壇土の痕跡はほとんど残っていない。ただし、直径1.2~1.5mほどの土質のやや違う部分が約3m間隔で東西に2つならぶ。きわめて痕跡的なため、確証はないが、回廊礎石の抜取穴となる可能性がある。回廊の基壇幅についても明確でないものの、第95次調査で推定している5.6mとみて矛盾はない。

東西溝SD180 調査区中央部やや南寄りを東西に横断する素掘溝。第95次調査で検出したSD180の東への延長にあたる。回廊南雨落溝SD161にほぼ接するが、それより新しい。幅2~3m、深さは約60cmである。検出した東西長約22m分で西が40cmほど低く、現地形と同様に、

西流していたことは明らかである。出土遺物から、藤原宮期の遺構とみてよい。

この溝は、若干南にずれるものの、藤原京三条大路北側溝の想定位置にほぼ合致している。対になる南側溝が未確認であること、周辺での条坊遺構検出例が乏しいことなど、多少の問題点は残すが、時期の一致とあわせて、三条大路北側溝と判断してよいだろう。

掘立柱塀SA325 調査区中央部、SD180の北側を東西に横断する掘立柱列。柱掘形は約50cmの方形で、径20cmほどの柱痕跡に黄褐色粘質土が入るのが特徴である。

第95次調査でも、同様の位置にこの柱列を検出しており(SA182)、回廊建設時の足場と考えていたが、本調査区では中門SB320上を直線的に横断することから、第95次調査で検出したSB190に接続する、藤原宮期の塀である可能性が高まった。なお、南面回廊南雨落の位置で確認した第95次調査の掘立柱東西塀SA181につながる遺構は、本調査区では検出できなかった。

土坑SK326・SK327 調査区中央やや東寄りの北壁にかかる2つの土坑。相互の間隔は約2.7mで、いずれも検出面から1~1.2mの深い掘形をもつ。最上部には吉備池廃寺所用の軒丸瓦などが廃棄されていた。2つが対になって幢竿支柱を構成する可能性もあるが、位置的

には金堂中軸線より西に寄っており、中門中軸線を折り返した西側には、同様の遺構がない。

井戸SE330 調査区中央部東寄りにある井戸。井戸枠が抜き取られた様相を呈し、掘形は明確でない。抜取穴の直径は約2.0m。中門もしくは回廊の雨落溝所用と思われる玉石が廃棄されていたが、それ以外の遺物はごく少ない。遺物から藤原宮期の遺構とみられる。湧水が激しく、検出面から約1.4m下に砂層があることを確認して、掘り下げを断念した。

このほか、SE330の南に、SD180の北肩を切るかたちで、性格不明の土坑SK328がある。さらに調査区東南隅には、近世～近代と思われる直径約2.0mの野井戸SE329がある。

北 区

第105次調査区の東方、桜井市教育委員会による調査区(1998年度)の南に隣接し、金堂の北方にあたる。検出したおもな遺構は、大型掘立柱建物1棟とその雨落溝のほか、掘立柱建物数棟、井戸、東西溝などである。当初、39×5mの南北に細長い調査区を設定したが、その北端部で大型掘立柱建物を発見したため、調査区を東西に大きく拡張した(図87)。

調査区の旧地形は、南および西が相対的に高く、北東部が低い。基本層序は、①現在の水田耕作土(暗茶灰色粘質土)、②近世以前と考えられる水田耕作土(黄褐色粘質土)があり、その下層は花崗岩が風化した特徴的な模様をもつ、明黄灰色シルトの地山となる部分が大半である。しかし、北東部は急激に地形が落ち込み、②の下層に、③中世の瓦器を含む暗褐色粘質土、④8世紀の遺物を含む明茶色粘質土(整地土)がつづく。

遺構は調査区の北方に集中しており、③層上面で耕作にともなう素掘小溝を多数検出した。これらの溝を掘削して建物遺構を検出したわけだが、当初設定した南北トレンチの南半部は、素掘小溝さえ希薄であった。それらが失われるほどの削平を近現代にうけたのか、もともと高い位置にあって水田に適さなかったのかは不明だが、いずれにしてもその部分の旧地形は高かったことになる。なお、北東部を除く遺構の大部分は地山面で検出した。遺構面の標高は、次に述べる大型掘立柱建物SB340周辺で80.8～81.0m、その他は81.3mほどである。

大型掘立柱建物SB340 調査区北方にある桁行11間×



図86 中門SB320西南部の南北石組溝(北から)

梁行2間の東西棟建物。東妻は調査区の東壁際にあり、西妻は調査区の西端付近で検出した。建物の全長は東西28.0m×南北5.4mで、柱間寸法は桁行約2.5m、梁行約2.7mを測る。柱掘形は、一辺が約1.5～2.0mの方形で、深さは個々で若干異なるが、検出面から1.1～1.5mほどである。東西の妻柱は、側柱にくらべて平面がやや小さく、さらに東妻柱は検出面からの深さが約1.0mと浅い。柱のほとんどは抜き取られているが、柱痕跡からみて、柱径は30～35cmと考えられる。

建物の外側(北側柱の北および南側柱の南)には、素掘りの東西溝がある(SD341・SD342)。溝幅は40～60cm、検出面からの深さは20～40cmほどである。この東西溝は、建物の西端近くで直角に折れて南北溝となり(SD343)、調査区外の北方へのびる。これらは、建物の外側を囲うようにめぐることから、雨落溝と考えられる。建物の推定柱位置からの距離は約1.2mを測り、これが軒の出であろう。なお、東妻の東側にも同様の溝があるかどうかは確認できない。

建物の西南隅付近で溝がL字型に折れる部分には、埋土である淡黄色粘質土が溝外の南西方向に広がってお

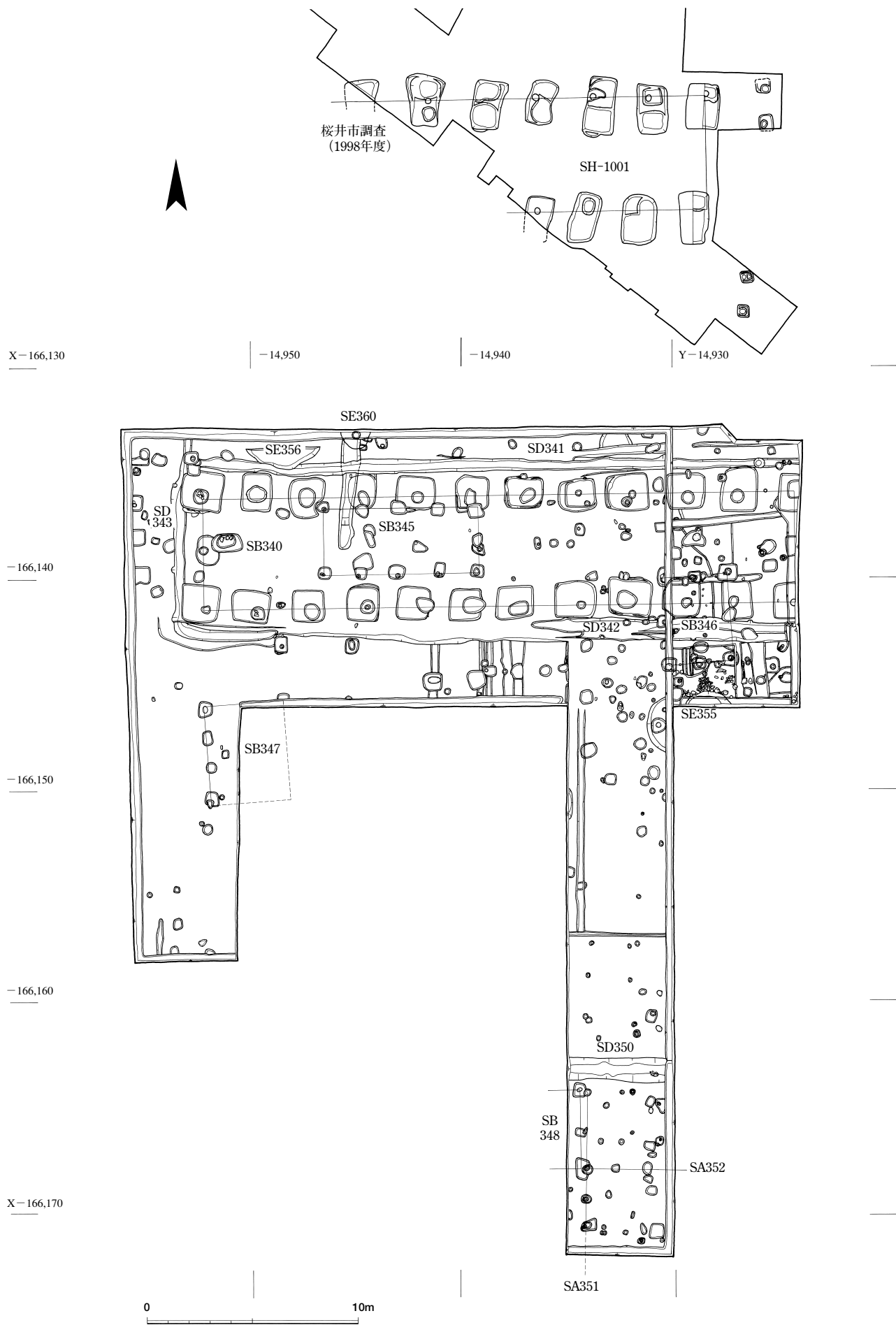


図87 第111次調査 北区遺構図 1:250

り、溝の水が氾濫したような状況を呈する。地形から、雨水は北から南流して東に折れ、東方に排水したと考えてよく、その屈曲点で氾濫したものとみられる。

また、断面の観察によれば、ほぼ同位置で1度もしくは2度にわたる溝の造り替えがあり、建物はある程度の期間存続したらしい。なお、これらの溝からは瓦片が比較的多く出土するが、この建物が掘立柱で、柱径も比較的小さいことを勘案すると、出土した瓦片は別の建物で使われた可能性が高い。

柱掘形の検出は、建物の東部を除き、地山上面でおこなったが、溝で囲まれた内部は、周囲よりやや地山上面の標高が低く、地山によく似た整地土で覆われていた。この整地土上面では、抜取穴の輪郭がようやくわかる程度で、掘形の輪郭をつかむことはできなかった。この整地土と掘形埋土もよく似た土質だが、溝の内側となる部分の地山を掘りくぼめたのち、掘形を掘って柱をたて、整地を施しているようである。整地土中に遺物がほとんどないことから、建物内部を低くして使用したのではないようだ。なお、この整地土は締まりがなく軟質で、建物外周の雨落溝は、これを切り込んで造られている。

一方、建物の東部は、地山が北東に向かって急激に落ちこんでおり、整地をしたうえで、掘形を掘っている。この整地土には、数ヶ所の焼土溜を含み、焼土溜には飛鳥Ⅰの高杯Cのほか、焼けた壁土がまじる。これの北側で1998年に確認された掘立柱建物でも、抜取穴に焼土が含まれており、近辺で火災があったことは疑いない。金堂や塔など、伽藍中枢部の火災痕跡は皆無だが、『大安寺伽藍縁起并流記資財帳』という火災は、これを伝えたものであろうか。

なお、SB340の東南隅と西北隅の柱穴では、掘形に切られている柱穴もしくは土坑があり、7世紀中期以前にも何らかの施設が存在したことをうかがわせる。

掘立柱建物SB345 SB340に重複して、その内側にある桁行4間×梁行1間の東西棟建物。東西の妻柱を検出していない。柱間寸法は、桁行が約1.8m、梁行が約3.1m。柱掘形は50~70cmほどの方形で、深さは検出面から約30cmである。黄褐色の柱痕跡が残る部分があり、柱径は約20cmである。出土遺物がないため、遺構の時期は明確ではないが、比較的整った掘形がほぼ正方位にならぶことから、藤原宮期と考えておく。



図88 大型掘立柱建物SB340(西から)

掘立柱建物SB346 SB340の東半分で重複する方2間の南北棟建物。中心の柱はなく、総柱にはならない。柱間寸法は、桁行(南北方向)が約1.8m、梁行(東西方向)が約1.5m。藤原宮期の遺構である。

掘立柱建物SB347 発掘区南西部にある桁行3間×梁行2間の南北棟建物。建物の西側柱の柱穴4つを検出し、北妻柱および東北隅柱は調査区中央部の南壁にかかる。柱間寸法は、桁行が約1.5m、梁行が約1.8m。柱穴は北でやや西に振れ、ごく浅い。時期不明。

井戸SE355 調査区東部の南壁にかかる井戸。直径2.5m以上で、掘形は抜取穴に破壊されている。この北側に、井戸中心部にむけてやや傾斜をもつ石敷きがあり、西方にも土坑状の浅い掘り込みがあることから、当初は周囲を石敷きにしていた可能性が大きい。出土遺物からみて、8世紀中頃の井戸と考えられる。

井戸SE360 調査区中央部の北壁にかかる井戸。井戸枠は抜き取られており、検出面での抜取穴の径は約1.3m。掘形は抜取穴によって破壊され、抜取穴の埋土は、中央が下がる層状の堆積を呈する。また、検出面から1.4m下の底面には、直径35cm、深さ20cmほどの円形

のくぼみがある。この部分は柱痕跡状の淡黄色シルトで、曲物が抜き取られず、痕跡として残ったものらしい。出土遺物は少ないが、8世紀中頃の井戸と考えられる。

SE360の西側にも、北壁にかかって井戸がある(SE356)。直径3m以上の比較的大規模な井戸だが、井戸枠などは抜き取られている。出土遺物から、10世紀頃の遺構と考えられる。平面的な掘り下げは断念した。

東西溝SD350 調査区南東部、南北トレンチの中央やや南寄りにある幅1.0m、深さ50cmほどの素掘りの東西溝。一部に拳大～人頭大の玉石があり、玉石の護岸が施されていた可能性がある。8世紀中頃の土器が出土したが、溝の性格は不明。(箱崎和久)

3 出土遺物

瓦類 軒丸瓦19点、軒平瓦2点、丸瓦446点(99.54kg)、平瓦2,904点(398.55kg)が出土した。北区・南区ともに一定の出土量があるが、北区の方が多い。北区では、SD341・342と、その上層にある素掘小溝からの出土が多く、丸・平瓦ともに北区の出土量全体の20%を占める。一方、南区では、SD180からの出土がもっとも多いが、南区の出土量全体に対する比率は、平瓦で7%、丸瓦は5%にすぎず、大半が包含層からの出土である。

軒瓦は、吉備池廃寺の創建瓦である軒丸瓦I型式が18点(I Aが9点、I Bが7点、種別不明が2点)、軒平瓦I b₁が2点と圧倒的に多いが、そのほかに藤原宮式軒丸瓦6274A bまたはA cが1点ある。北区からは、I Aが6点、I Bが4点、種別不明・I b₁・6274A bまたはA cがそれぞれ1点出土。南区からは、I Aが3点、I Bが3点、種別不明・I b₁がそれぞれ1点出土した。

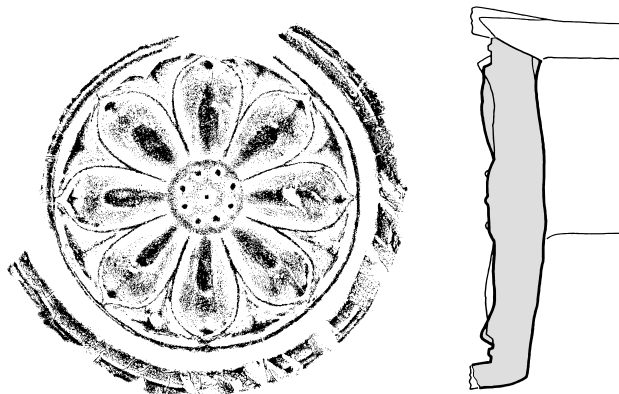


図89 吉備池廃寺所用軒丸瓦 I A 1:4

丸・平瓦は、過去の調査と同様、厚手品(1.8~2.6cm)と薄手品(1.1~1.6cm)がある。

丸瓦は、すべて一木模骨を使用した玉縁式で、全長50cm、重さ5kgの完形品が1点出土している。凹面は未調整で、筒部から玉縁部にかけて一連の布目が確認できる。ほかに玉縁の肩部が剥離した例があり、筒部と玉縁部を一体の粘土板で製作したらしい。凸面は丁寧なタテナデ調整で、叩き目をほとんど残さない。

平瓦にも完形品に近いものが数点ある。厚手品は、凹凸面ともに丁寧にタテナデ調整を施し、叩き目や布目をほとんど残さないが、薄手品は叩き目をナデ消すほか、平行・正格子・斜格子叩き目を残すものがある。また、藤原宮期と考えられる縄叩きの丸・平瓦が出土しているが、全体の出土量に対して、平瓦が約2%、丸瓦は1%に満たない程度である。このほか、鬘斗瓦と磚が1点ずつ出土している。(小谷徳彦)

土器 土器はおもに北区から出土しており、7世紀中頃～中世におよぶ。こうした状況は、第105次調査の中央区とはほぼ同様であり、吉備池廃寺北半の一角が、長年にわたって利用されつづけた様相がうかがえる。

4 成果と課題

中門の発見 昨年度までの調査によって、金堂や塔は同時代の他の寺院とは隔絶した規模をもつことが判明している。ところが、今回発見した中門は、東西12.0m×南北9.8mほどと推定される基壇規模からみて、桁行3間×梁行2間という予想外に小規模なものになる。さらに7世紀の中門は、現存する法隆寺中門(4間×3間)をはじめ、飛鳥寺中門(3間×3間)、大官大寺中門(5間×3間)など、梁行を3間にとるものが知られており、それとの比較においても規模が小さい(図90)。

一方、回廊については、基壇幅が約5.6mと推定できることから、梁行3.0m程度の単廊と考えられる。この梁行寸法も、他の寺院の回廊と比べれば小規模であるが、中門と回廊の組み合わせだけをみれば、バランスのとれた規模といえる。もっとも、金堂や塔の規模とのアンバランスは否めず、この点は今後の検討課題である。

大型掘立柱建物の性格 最初に述べたように、北区で発見した大型掘立柱建物とよく似た建物は、桜井市教育委員会の1998年度の調査でも発見されている(SH-1001)。

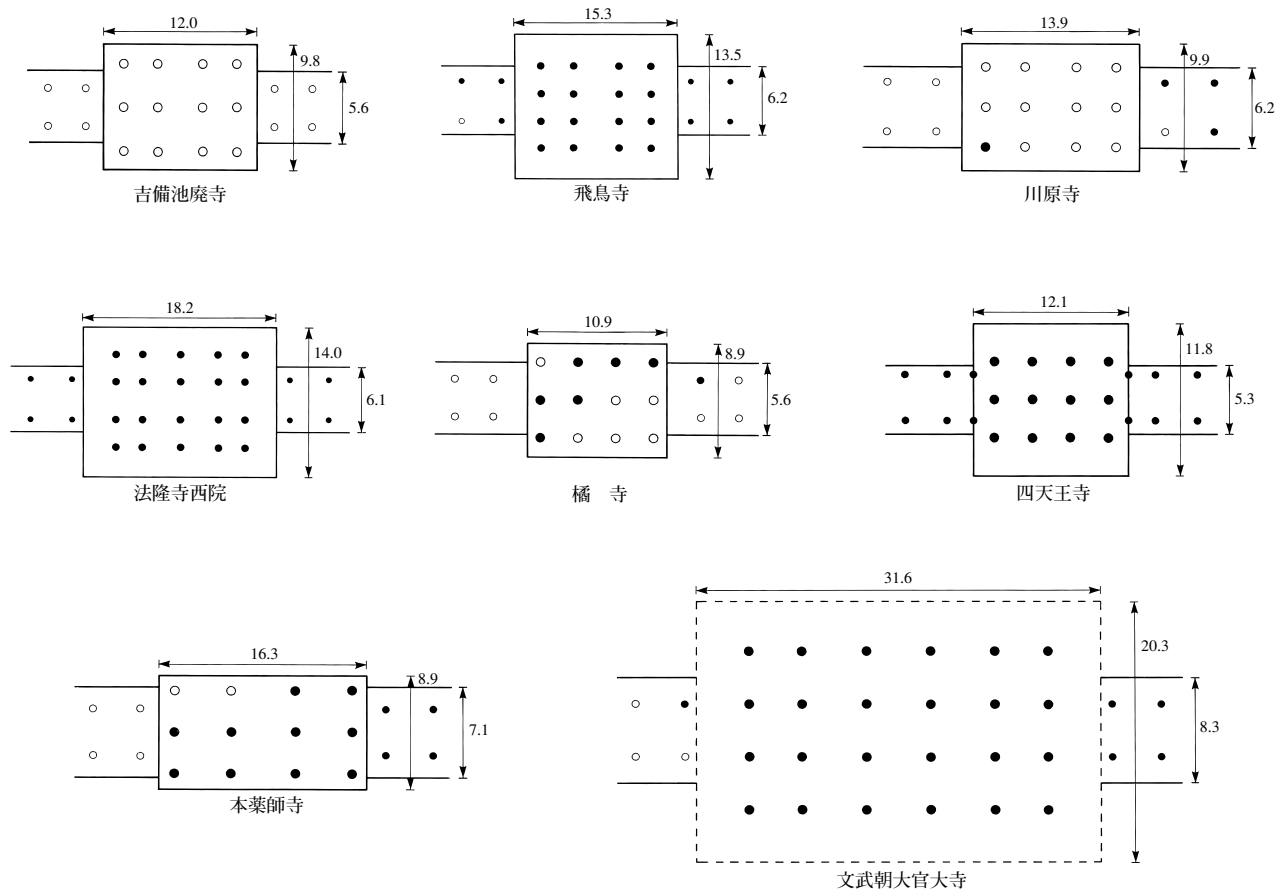


図90 7世紀の寺院における中門と回廊の比較模式図（○の柱位置は推定）

SH-1001は、桁行6間以上×梁行1間の東西棟で、柱間寸法は、桁行が2.72m、梁行が5.45mである。また、柱掘形は、最大で1.7×2.8m、深さ1.5mほどの規模をもつ（『吉備池廃寺（吉備池遺跡第9次）発掘調査資料』桜井市文化財協会、1998年）。これには、周囲の雨落溝はないものの、本調査区で検出した南北溝SD343が北にのびてSH-1001の西を通ると考えれば、SH-1001は桁行9間で、本調査区で発見した大型掘立柱建物SB340と、西妻をほぼそろえることになる。

なお、SH-1001とSB340は側柱間で約13.5m、棟通り間で約18.9m離れている。この2棟の建物は、柱位置や柱間寸法に若干の違いはあるものの、巨大な柱穴をもつことや、出土遺物の年代観から、同時期の遺構と考えてよい。ちなみに、第105次調査で確認した東西棟建物SB260も、SH-1001と北側柱列をそろえるなど、高い計画性が認められ、一連の施設と考えられる。

SH-1001とSB340のような細長い建物は、桜井市教育委員会の調査所見のように、僧侶が日常生活をおくる僧房とみて間違いのないだろう。現存する最古の僧房は、法隆寺西院伽藍の東にある東室（747年以前に建立）で、発掘調査で確認できる最古の僧房遺構は、川原寺（665年ころ創建）の僧房である（ただし、僧房の創建年代は不明）。今

回発見した僧房遺構は、百濟大寺（639年創建、673年移建）のものと考えられるから、これまで発見されているなかでは、最古の僧房遺構となる。

ところで、8世紀の官寺では、僧房は講堂を取り囲むように東・西・北の3方に配して、三面僧房を構成するのが基本形と考えられている。また、平城薬師寺西僧房の発掘例のように、梁行の大きい僧房（大房）と梁行の小さい僧房（小房＝小子房）の柱間をそろえて並立させ、一体として使ったようである。

ただし、このような特徴がいつまで遡るかは不明で、SH-1001とSB340は、南北に2棟並立し、密接な関係をもつと考えられるものの、梁行規模はほとんど同じでありながら、全長だけでなく桁行方向の柱間寸法にも若干の相違点がみられるなど、8世紀における僧房の特徴と異なる点がある。これらが、7世紀中頃まで遡る一般的な様相なのか、百濟大寺独自のものなのかは即断できないが、僧房の建物形式やその発展過程を究明するうえで、貴重な発見といえるだろう。

また、僧房は、桁行の柱間2間もしくは3間を一房として間仕切り、桁行全長が長い場合は、建物の中央部に馬道とよぶ通路を設けるのが一般的である。SB340は、桁行全長が11間とそれほど長くないが、中央間を馬道と

し、2間を一房とした僧房に復原することができるだろう。すなわち、桁行2間(約5.0m)、梁行2間(約5.4m)が一房の空間となる。

ところで、金堂の南北中軸線は北区の発掘区西端付近を通るから、確認した2棟の僧房SB340とSH-1001は、金堂中軸線から左右にふり分けるかたちで、対になる建物と東西に並立している可能性がある。したがって、確認したもの以外にも多数の僧房の存在を想定することができ、ここで生活した僧侶の数の多さがしのばれる。中門・回廊が造られていることとあわせて、吉備池廃寺の完成度は高く、名実ともに寺院として機能していたことは確実といえよう。

吉備池廃寺の伽藍配置 今回の調査によって、中門は金堂の中心を通る南北の中軸線上になく、西へずれていることが明らかになった。金堂中軸線から中門中軸線までの東西距離は約10.6mである。また、東面回廊の推定棟通りから中門中軸線までの距離は約45.0mとなる。金堂と中門の西辺を合わせているわけでもなく、塔との関係から中門の位置を決めたわけでもなさそうである。したがって、なぜ中門が金堂の中軸線上にないのか、その位置をどのようにして決定したのかは不明である。

ただし、この中門の位置を、金堂心と塔心の中央を通る伽藍全体の南北中軸線で西に折り返した地点は、第89次調査の2つのトレンチにはさまれた未調査区域にあたる。したがって、塔の南にも、伽藍全体の中軸線寄り(やや東)にずれて、同規模の中門が建つ可能性はあるだろう。つまり、金堂と塔のそれぞれに対応して、2つの中門が建つ、という異例の伽藍配置をとる可能性が想定されるのである。

一方、北区で今回発見した僧房の配置については、一定の規則性があるようである。すなわち、金堂と塔の建物心々間距離は約84.6mだが、これは金堂心から僧房の北側柱までの距離とほぼ等しい。また、先述したように、僧房は金堂中軸線をはさんで東西に並立している可能性がある。なお、84.6mという距離は、飛鳥時代の測地尺である高麗尺(=大宝令大尺、1大尺=1.2小尺≒0.354m)に換算すると239尺となり、240尺として計画されたものともみられるが、その当否を含めた吉備池廃寺の伽藍配置計画の解明は、今後の課題である。

伽藍配置に関わるもうひとつの重要な問題は、北区で

発見を予想していた講堂がみつからなかったことである。また、金堂と塔の中間北方を発掘した第105次調査でも、講堂は発見されていない。講堂の所在に関連して、北面回廊の所在も判明しなかった。

そこで、そもそも講堂は存在したのだろうか、という疑問が生じる。しかし、『大安寺伽藍縁起并流記資財帳』によれば、辛亥年(651)春3月に完成し、百済大寺に施入された繡仏は、その後身である大安寺に伝存している。薬師寺の例からみると、繡仏は本来、講堂に安置されるべきものであったようだ。また、天智も、のちの大安寺本尊となる丈六仏ほかの乾漆像を施入しており、それらが可能な程度までに、堂宇の建設が進んでいたことは間違いない。発掘調査の成果でも、吉備池廃寺の伽藍建築は完成度が高いといえる点とあわせて、やはり講堂は存在したと考えてよいだろう。

8世紀における官寺の伽藍配置をみると、僧房は講堂の近くに配置されている。北区の北方では瓦が多量に出土することから、瓦葺建物がこの付近にあったことが想像される。また、先述したように、北区の南半部の旧地形は現状より高かったと考えられるので、建物の基壇が存在した可能性は否定できない。いささか逆説的になるが、検出されなかったとはいえ、講堂もしくは食堂などの基壇建物が、北区南端付近にあった可能性は捨てきれないのである。

また、伽藍全体の広がりという点では、今回の調査によって、少なくとも金堂北側には複数棟の僧房の存在が確認できた。これらを伽藍中軸線から西に折り返せば、塔の北方にも僧房が建ち並ぶ姿を想定できるかもしれない。さらに、2000年度におこなった桜井市教育委員会の調査では、伽藍北方の低丘陵上からも、吉備池廃寺と関連をもつ遺構を検出している。したがって、吉備池廃寺は、かなり広大な寺域を有していたと考えられる。

今回の調査では、講堂や北面回廊は検出できなかったが、中門と僧房を発見したことは大きな成果であった。それによって、吉備池廃寺の伽藍配置の一端が明らかになっただけでなく、7世紀の寺院史および建築史に新たな資料を提供したからである。とくに多数の僧房が建ち並んでいた状況を推定できた意義は大きく、巨大な金堂、塔とあわせて、日本最初の勅願寺としての威容が、ますます浮かび上がってきたと言えるだろう。(箱崎和久)